



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「大学における文化芸術推進事業」を事例としたURAの支援のあり方について
Author(s)	森岡, 和子; 川本, 真奈美; 小俣, 友輝 他
Description	第5回人文・社会科学系研究推進フォーラム. 2019年3月19日(火). 主催: 早稲田大学研究戦略センター. 早稲田大学 国際会議場会議室. 東京
Issue Date	2019-03-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96185
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/
Type	conference poster
File Information	2019_5th_JINSHAforum_poster.pdf

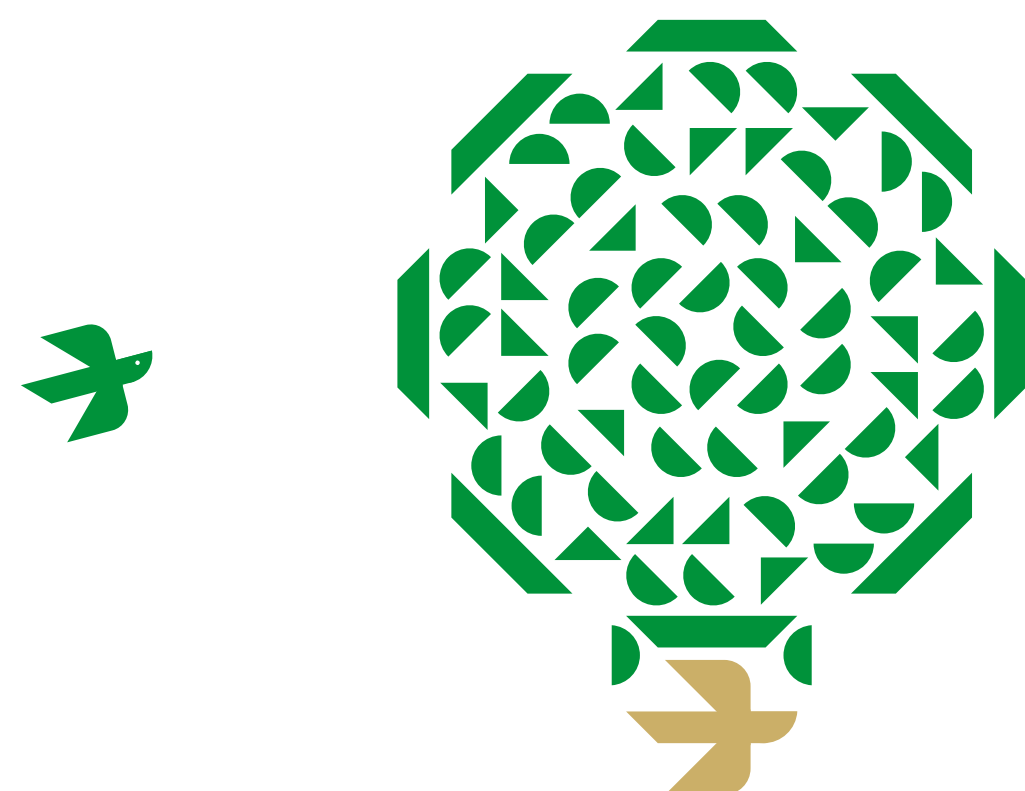


「大学における文化芸術推進事業」を事例としたURAの支援のあり方について

北海道大学 ○森岡 和子 (文学研究科 研究推進室) 小俣 友輝 (URAステーション)
川本 真奈美 (創成研究機構) 菊池 優 (総務企画部広報課)

文化庁助成事業「大学における文化芸術推進事業」は、芸術文化活動を支える高度な専門性を有したアートマネジメント（文化芸術経営）人材の養成を推進するため、実践的なカリキュラムの開発・実施を支援するファンドである。北海道大学では大学院文学研究科を中心に平成30年度の事業に採択され、**学芸員リカレント教育プログラム**（「ミュージアム学芸員の企画展制作＜立案・運営・評価＞スキル養成深化プログラム」、通称：学芸リカプロ）を3年計画で実施している。

本報告では、前年度の申請不採択を経て、翌年度の申請、採択、プログラム実施に至る実践事例とその分析を通して、**ファンド獲得および実施におけるURAの支援の在り方について**考察する。あわせて、文化芸術推進事業と人文社会科学系研究の親和性の高さの観点から、**アートマネジメント事業を活用した人文社会科学系研究推進の可能性**について論じる。



時系列で見る事業と支援の流れ

2014年	8～9月	文学研究科、創成研究機構が札幌国際芸術祭2014との連携イベントを開催（TERRACEの原点） 【文学研究科は広報委員会+URAが、創成研究機構は学術専門職を中心に企画】
2015年	7月	文学研究科、国際教育音楽祭バシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）とハワイ大学と連携して国際協働授業を実施（～2017年まで3年連続開催） 【URAがハブとなり、教員+大学事務+PMFをつなぐ】
2016年	4月	アーティストと研究者の意見交換会（お見合い前夜）を開催 【URA等が核になり、研究者とアーティストをつなぐ】
	11～12月	文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の申請開始 【事業推進に適切なファンドをURAがリサーチし研究者に提案】
2017年	2月	TERRACE～科学とアートが出会う場所 始動 【札幌国際芸術祭ゲストディレクターの太友良英氏を迎え「科学と芸術」をテーマとしたキックオフシンポジウム開催】 TERRACE代表にイグノーベル賞受賞の中垣俊之教授就任
	3月	文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」不採択 【URA等の中で敗因分析】
	2～18.3月	TERRACE関連イベントを続々実施 【URA等と研究者が連携して年間39のイベント等を実施】
	8～10月	札幌国際芸術祭2017 【北大博物館で芸術祭イベントを実施】
	10月	文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」中間報告会に参加し、他大学事業・審査員から情報収集 【研究者とURA等が参加】
	12月	文化庁「大学における文化芸術推進事業」テーマと申請者を変えて申請に再チャレンジ 【研究者とURAの協働作業】
2018年	1月	申請関係者・連携者の事前顔合わせ会 【URAが企画、連携研究者同上、アーティストとをつなぐ】
	3月	文化庁「大学における文化芸術推進事業」に採択決定！交付申請 【交付申請手続きにあたり、プログラム内容の確定は研究者、その他事務手続き、文化庁との調整はURAが担当】
	4月	TERRACE報告書完成
	4～5月	講師、動画撮影スタッフ、パフォーマー等と打ち合わせ、受講生募集、広報、講師招へい手続き 【招へい講師と講義内容に関する調整は研究者、事務・招へい手続、広報関連、立ち上げのベースメイク、プログラムのウェブサイト制作はURAが担当】
	6月	専任事務補助員着任 【面接にURAが関わり事務処理・広報スキルを判断する、着任後は事務手続等を徐々に引き継ぎ、助言者へとシフトスタッフミーティングには継続的に参加】
	7月	プログラムスタート・キックオフシンポジウム 【URA等が理事挨拶の交渉にあたる】 講義スタート 【URAは講義撮影スタッフとして協力、イベント時にはイベント実施スタッフとして参加 ウェブサイト、Facebookによる情報発信支援】
	9月	専任特任准教授着任 【URAはプログラム内容や運営に対しての意見は徐々に控える】
	10月	文化庁「大学における文化芸術推進事業」中間報告会に参加し、他大学事業・文化庁関係者と情報交換 【プログラム運営スタッフ+URA等6名で参加】 中間報告書類提出 【この頃からURAは直接的な運営支援を行わず側方支援に回る】
	12月	文化庁「大学における文化芸術推進事業」2年目の申請を提出 【URAはプログラム内容については関わらず、予算精算等事務的な事項への助言を行う】
2019年	1月	1年間の成果報告書冊子作成準備
	2月	成果報告会実施準備 【ポスター発表に関する情報提供】
	3月	成果報告会 【イベント支援員募集支援】
		2年目の採択決定！！
		文化庁への成果報告書作成
		2年目のプログラム内容確定、交付申請
	4月	2年目の受講生募集、キックオフシンポジウム、講師招へい手続等準備

そもそもスタート

- ▶ 科学とアートの方で、大学、アーティスト、地域がつながって新たな価値創造をする **TERRACE～科学とアートが出会う場所～**
- ▶ 札幌国際芸術祭を北大構内で実施したい
- ▶ アーティスト・地域と連携事業を行うことにより北大の研究を紹介したい
- ▶ 運営のためのファンドを探す過程でURAが文化庁事業が適切と判断した
- ▶ アウトリーチよりも人材育成事業などの文芸研究科教員に提案



文化庁事業申請プロジェクト始動！

「北の地域の価値創造を担うアートコミュニケーター養成事業」

- 申請のプレアワードを実施
- 関係教員へのヒアリング
- 連携先と打ち合わせ
- 申請書の作成

繰り返される問い…

なぜ北大が
フートを？

知名度の低さ
実践事例を
積み重ねる
必要性を痛感

行動！再チャレンジに向けて
転んでもタダじゃ起きない

- 研究者と話し合った結果、アートコミュニケーション養成ではなく、**学芸員の再教育**ならチャレンジしたいという研究者が新たに現れた
- 文化庁の**事業中間報告書**に行っていた**情報収集**した（研究者＋URA）事業に採択された他大学から情報収集を行い、次の申請の参考にした報告会に参加された審判員の話聞き、参考にした
- **連携先の絞り込み**を行った
前年度の連携交渉を活かしつつ、研究者主導で連携交渉を行った
- **TERRACEの活動は続け**、北大がアートで研究推進していることをアピール
2017年2月から2018年3月まで、計39のアート関連イベントを実施。

申請再チャレンジプロジェクト始動！

ミュージアム学芸員リカレント教育プログラム

- **ニーズ・ターゲットの明確化：**企画展制作において、全国でさまざまな新たな試みが行われているがそれらを体系的に学ぶ機会を求める声が道内学芸員から届いていた
- **ミッション・ゴールの明確化：**企画力のある学芸員養成がミッション、その結果、道内の文化芸術推進、社会イノベーションへとつながる

木になり
鳥になり

北海道大学大学院文学研究科

ミュージアム学芸員の企画展制作《立案・運営・評価》

スキル養成深化プログラム

「學藝カラボ」は3年間で企画展制作のスキルを学ぶ、ミュージアム学芸員のための「カルト育プログラム」です。課題・実習・実習を通して、最終的に、実際の展示制作・運営、および観覧者行動をミュージアムで実現できる企画展の作成をプログラムの成果とします。また、毎年の達成率や成果イベントシウム等で広く公開します。

1. 育成対象者

美術館・歴史系博物館の学芸員	文化施設等の専門職員
文化行政に携わる自治体職員等	学芸員職を目指す大学院生等

2. 育成の意義

2-1. 背景

現代社会はミュージアムと学芸員に求められる役割が多岐にわたる。社会に求められる役割は、単に展示・鑑賞に留まらず、教育・研究・交流、社会の発展、都市の発展やコミュニティの形成に貢献すること。

↓

博物館の現状

しかし現状では、現場の学芸員は日常業務に追いつくことが難しく、また、ミュージアムを単なる展示の場として捉える傾向があり、学芸員の役割は、従来の展示制作に限られている。

↓

学芸員の役割

学芸員の役割は、単に展示制作だけでなく、学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。

2-2. 育成の意義と社会的効果

学芸員は、単に展示制作だけでなく、学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。

↓

学芸員の役割

学芸員の役割は、単に展示制作だけでなく、学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。

3. プログラムの内容・特色

学芸員の役割は、単に展示制作だけでなく、学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。

↓

学芸員の役割は、単に展示制作だけでなく、学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。

4. 平成30年度事業における取り組み

企画展制作の立案・運営・評価

学芸員の役割は、単に展示制作だけでなく、学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。

学芸員の役割は、単に展示制作だけでなく、学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。

学芸員の役割は、単に展示制作だけでなく、学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。

学芸員の役割は、単に展示制作だけでなく、学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。学芸員の役割は、単に展示制作に限られている。

玉碎！主役をはき違えるな

- 何がうまくいったかを支援者の間で分析した
- プロジェクトの軸、ミッションにブレがあった
関係者の間でアートコミュニケーター像にギャップがあった
育成後の出口（活躍の場）が明確に定まっていなかった
- 主導者は誰？
研究者はアイデアだけ出し、申請書のほとんどはURAが書いた
専門性の低い浅い内容になってしまった
- 研究者の想いと支援者の想いのずれ
研究者に喜んでもらえる企画ではなかった
研究者が思い描いているプロジェクトと、URAが立案した内容に
ズレがあり、目指す社会貢献の場が異なっていた
- 連携を欲張りすぎた
URAが次々と連携協力を取り付けたため、研究者が想定する
ネットワークの範囲を超えてしまった
プロジェクトに一貫性がなく、実現可能性に疑念が持たれた
- 育成対象は実務者のプロ集団を想定した計画だったが、同時期文化庁に
申請された札幌市のアートマネジメント事業（ボランティア育成主体）
との差別化が理解されにくかった
研究者が両方に関わっていたので、より複雑な枠組みになっていた

求められる支援とは？その工夫 申請～採択まで

- 研究者主導でプログラム設計、申請書の核部分は研究者が書いた
- 予算積算ほか申請書の事務的な部分はURAが担った
- 申請書の視認性・可読性をあげるためのレイアウト調整を行った
- 研究者のアイデアをもとにパンチ絵原案を作成、ブラッシュアップ
- 連携研究者、連携アーティストとの連絡調整はURAも積極的に関わった
URA相手だと率直な意見が言える
- 大学事務担当および文化庁の申請窓口との調整はURAが行った
- 申請書提出後採択前に連携関係者があつまり、**関係者顔合わせ会を実施**
連携研究者、アーティストが各自の研究や取り組みを紹介し交流する会
→ネットワークingにより事業開始後の連携がスムーズに



支援者としての立場の変遷 コプレイヤーからサポーターへ

プレアワード

情報収集
連携調整
予算精算
申請書作成

申請書提出

ネットワーク形成

採択決定

ポストアワード

交付申請

事業スタート

広報
招へい手続
イベント準備
ベースメイク
スタッフ採用
支援

専任スタッフ着任

事業実施支援
広報支援
事務助言
報告書・申請書
作成側方支援
ベースメイク

支援者の立ち位置

【準備・ファンド獲得期】

研究者と支援者がそれぞれの得意分野の役割を担う時に事業の内容に踏み込んだ議論も行う

共同作業者＝コプレーヤー

【立ち上げ～自走準備期】

研究者は事業の内容を充実させることに注力する
支援者は、研究者が円滑に事業を実施できるように、ロジを含めた外回りを固める

実施協力者＝パイプレーヤー

【自走開始期】

専任スタッフの着任とともにこれまでの事務引継ぎを行う求められれば助言を行うが、事業の方針等には口を出さず事業の応援者として関わる

側方支援者＝サポーター

まとめ

URAの支援のあり方について

- ▶ 単発ファンド支援ではなく、支援者の中であらかじめ科学とアートの出会いによる価値創造を考えるグループTERRACEの下地があった
→ 関心分野、得意分野をもつことの大切さ
- ▶ 異分野の研究者や地域との連携により申請のなかでちの役割を果たす
→ 常日頃のネットワーク形成が**大事**
- ▶ 予算、各種手続き、事務担当、理事・省庁とのつなぎ、広報等
→ 研究者が手が届きにくいこと・苦手なことは**URAの活躍の場**
- ▶ プレアワード→採択で終わりではなく、立ち上げ→自走までの支援
→ プロジェクトの段階に応じた**支援の見極め**

文化芸術振興と人文社会系研究推進

アートマネジメント事業と人文社会系研究の親和性の高さ

- **地域連携**
文化政策の観点から自治体・地域のミュージアムとの連携
地域のアーティスト、ボランティアとの連携が可能
- **異分野融合**
建築、環境、医療、福祉等、多彩な分野との融合・連携が可能
学芸員の専門分野はまさに異分野融合（美術館、博物館、科学館、動物園、水族館）
- **SDGs**
文化財保護、アーカイブ、社会包摂という観点からSDGsへの貢献

地域創発のソーシャル・イノベーションの可能性